

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520478

研究課題名(和文) 伝達言語の認知語用論的研究：対話における発話構築と認知のメカニズム

研究課題名(英文) Cognitive Pragmatic Approach to Reporting Discourse: Utterance Construction and Cognition

研究代表者

崎田 智子 (Sakita, Tomoko)

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：10329956

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日常言語の対話的かつ伝達的な本質を、談話情報理論、社会的相互行為理論、認知言語学の多角的視座を統合した認知語用論のアプローチで分析することにより、伝達言語の発話構築メカニズムと認知的背景、特に、伝達に関わる文法構造、談話情報構造、認知システム、構築プロセス等の解明を試みた。相互行為の中で文構造を説明する対話統語論に、カテゴリー化、スキーマ化、拡張等の話者の認知能力の側面を統合することで、実際の言語運用における伝達に関わる言語事象を詳細に分析した。

研究成果の概要(英文)：This study explored the dialogic and reflexive nature of language by using the cognitive pragmatic approach. By expanding the theory of dialogic syntax, the study contributed to clarifying the connection between syntactic, dialogic, and cognitive aspects of language. It particularly investigated the speech construction mechanism and its cognitive background, with special attention to the grammatical structure, discourse organization, social interaction, information processing, and utterance construction process. It has shown that linguistic forms develop in the dialogic process that is deeply anchored in speakers' ability of categorizations, concepts of grammatical equivalences, knowledge of grammatical constructions, and grasp of linguistic conventions.

研究分野：認知語用論

キーワード：認知言語学 対話統語論 認知語用論 伝達 対話 発話構築 談話 スタンス

1. 研究開始当初の背景

伝統的統語論においては記号と記号との間の構造上の関係を単一の文内で分析してきた。これに対して Voloshinov ([1929]1986) や Bakhtin ([1952-53]1986)らに始まる言語と思考の対話性に基づく対話統語論(Du Bois 2014)においては、文と文との間の構造上の関係に焦点を当てることで、ある構造と別の話者によって産み出された既存の構造との間の写像関係を見いだす。

本研究開始に先立って崎田は、この対話統語論のアプローチに認知言語学的視点を組み入れて、日常言語における平行性(Sakita 2006)や話者間の提携(Sakita 2008)に関わる言語現象を探究していた。当時は談話と認知の視点を統合した認知語用論(山梨 2009)の重要性が唱えられ、その理論化が待望されており、その一端を担っていた。一方で、伝達話法は古くより言語の対話性を最も顕著に反映するものとして関心を集めていた(Voloshinov [1929]1986; Sakita 2002; Tannen 1989)。そのような中で、新しい認知語用論の枠組み内に対話統語論と認知言語学を統合した新しいアプローチを構築し、これを用いて伝達に関わる文法事象が創発するメカニズムを解明しようとする本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、談話と認知を統合して言語運用を研究する新しい認知語用論のアプローチにより、伝達言語の発話構築メカニズムと認知的背景を解明するものである。

認知語用論は、もともと関連性理論(Sperber and Wilson 1986)が中心となって台頭してきたが、言語運用のダイナミクスを認知的視点で解明するためには話し言葉を中心とする生きた談話や情報の流れの視点を付加することが不可欠であり、その核として談話言語学と認知言語学の統合的アプローチを理論化することが肝要である(e.g., Langacker 2001; Levinson 2006; Schegloff 2006; 山梨 2009)。

認知と談話のインターフェースを探求するために、本研究では、対話統語論(Du Bois 2001)を基盤としスキーマを軸にしたダイアグラフを用いて発話の構築メカニズムを分析することによって、同時にその背景にある話者の認知能力へアクセスするアプローチを構築することを目指した。これにより、相互行為の中で文構造を説明する対話統語論に、カテゴリー化、スキーマ化、拡張等の話者の認知能力の側面(Langacker 2008)を統合

し、伝達に関わる言語事象が対話の中で創発、構築されるプロセスとそれを可能にする認知的背景とを体系的に解明することを目的とした。

3. 研究の方法

対話における伝達言語の発話構築と認知のメカニズムを認知語用論の見地から詳細に分析するため、様々なレベルの人間関係と場面設定を含んだ自然言語データを収集し、談話分析及び定量分析を行い、ダイアグラフにより認知プロセスとともに詳細に分析記述した。

談話の流れに沿って対話の展開の中でそれぞれの発話が構築されるメカニズムを分析したが、発話構築の基盤となる響鳴と重要な要因であるスタンスの作用を分析するため、収集データの中で順に以下の文脈を抽出しながら分析を進めた。

- (1) 日常会話の相互作用一般
- (2) 伝達話法
- (3) 会話における譲歩
- (4) ナラティブ

日常会話だけでなく、従来対話とは別形態とされてきた独話や語りにおける発話産出までを含んでいる。また、特に談話標識に焦点を当てた。

データ分析手法に関しては、特に以下の点に関して検討を重ね、研究協力者からのフィードバックを取り入れつつ、分析に適用した。

- (1) 様々な文脈における対話の展開をダイアグラフ表記する方法
- (2) それぞれのダイアグラフに応じたスタンストライアングル分析による表示法
- (3) 自然言語データにおけるスタンスのタグ付け方法

また、対話の相互作用と響鳴のマッピングを、認知言語学における現行談話スペース(CDS)モデルによって示唆される焦点移動の連鎖や拡張として位置づけることで談話の一貫性や認知背景を説明するため、スキーマ化と拡張による発話の連鎖を図式化した。

4. 研究成果

本研究では、日常言語の対話的かつ伝達的な本質を、談話情報理論、社会的相互行為理論、認知言語学の多角的視座を統合した認知語用論のアプローチで分析することにより、伝達言語の発話構築メカニズムと認知的背景、特に、伝達に関わる文法構造、談話情報

構造、認知システム、構築プロセス等の解明を試みた。得られた成果のうち特に重要なものを以下に挙げる。

まず第一に、対話における発話構築のメカニズムを探究するため、(1) 日常の対話を通して話者が語彙と文法に関わる知識を組織化、再組織化、再文脈化するメカニズムを観察した。特に、対話の中で話者が響鳴を通して新たな言語表現を構築するメカニズムを明らかにした。(2) 対話統語論のアプローチを軸に、スタンス理論(Du Bois 2007)に基づいて、会話の流れの中で参与者それぞれの自己の位置づけ、客体への評価、参与者間の協定関係に焦点を当て、スタンスが様々なレベルで言語に表明されるメカニズムを分析した。特に、スタンス表出に関わる様々な言語表現に加えて、これらを調整する重要な役割を果たすメタ・スタンス標識の存在を指摘し、その特徴を明らかにした。(3) 自然言語データの観察に基づき、スタンスのタイプ、推移、影響、共起表現等を整理した上でメタ・スタンス標識の機能分類を行った。

第二に、主体の認知能力を基盤にして、対話の参与者の間主観性に基づき発話間の相互作用の中で特に響鳴を通して発話が動的に拡張されながら対話が進行していくメカニズムを探求した。この中で発話産出に関わる以下の特徴が明らかになった。

(1) 先行する複数の発話に部分ごとにかつ複合的に響鳴し、その連鎖の中で発話が構築され対話が進行する。

(2) 響鳴は、意図、状況、スタンスの差等を反映して、繰り返し、変形、代入、言い換え等を通して実現されるが、心的表象として共有されるダイアグラフ上のシンタグマティック・パラディグマティックな構造が基盤となっており、さらに、ネットワークに基づきカテゴリー化や拡張等が重要な役割を果たす。

(3) 響鳴は発話間の意味の関係性に関わらず、話者間の相互作用的提携を保持・強化する。

(4) 響鳴は再文脈化のプロセスであり、脱文脈化、再配置、再焦点化を通して元の意味や目的に何らかの変化を生み出しながら再文脈化が行われる。

(5) 響鳴の中で変化と対比が生じる中で一部が対話的不一致として前景化される。

(6) 響鳴は別々の話者の発話間に限らず、同一話者の一連の発話間でも生じる。

この結果、対話における発話構築のプロセスは、常に対話性を基盤にし、話者間の間主観性を反映し、カテゴリー化の能力による拡張、意味の連鎖による拡張、前景化・背景化等の主体の認知能力に基づくものであることが明らかになった。

第三に、談話や対話に現れる様々なシフトを発話者の自己の位置づけの観点から探究した。特に(1) 会話における語りに注目し、footing、ナラティブレベル、ナラティブ構造、主観的・客観的事態把握、トピック推移、意図、前発話者との分岐、事態への関与のそれぞれのシフトが、スタンスにおける自己の位置づけと深く関わることを調べた。(2) これらのシフトにおいて談話標識がスタンス標識として対人関係の機能を果たすことを明らかにした。また、(3) 語りに関するスタンス関係とその推移を図式化し、スタンス標識がスタンス関係を調整するプロセスを示した。さらに、(4) 従来対話を中心としてきた対話統語論の枠組みを拡張し、モノグラフ的語りの詳細をダイアグラフに表示することで、語り手や語り内の各発話者の言語的特徴やスタンス推移を響鳴と差異の観点から分析することを試み、さらに混在するスタンスをレベル化した。

最後に、対話の展開及び発話の創発には参与者間の共有認知が深く関与しており、その上でスキーマ化や拡張等の認知能力に支えられたマッピングが重要な機能を果たすことを明らかにした。特に、(1) 響鳴とスタンスとの関係を明確にし、スタンスの微妙な差異または推移が、多様な響鳴の枠組みの中に、語順、主語、態、トピック化、反復、語彙連結、代入、談話標識等を通して組み込まれ表現される様子を実証的に示した。(2) 対話の展開における響鳴のマッピングを焦点移動の連鎖や拡張として位置づけることで談話の一貫性や認知背景を説明するため、スキーマ化と拡張による発話の連鎖を明らかにした。(3) 従来対話とは別形態とされてきた独話や語りにおける発話産出に関しても、言語と思考の対話性を基盤にして発話プランニングと間主観性の概念を取り入れることで響鳴とスタンスが重要な役割を担うことを明らかにした。

以上のように、本研究では認知言語学のパラダイムに対話統語論の分析手法を組み合わせることで、発話構築と対話展開のメカニズムにアプローチした。言語伝達のダイナミックな本質、発話創発のメカニズム、その基盤となる認知のメカニズムの解明のためには、本研究で提起した認知語用論のさらなる進展が期待される。

< 引用文献 >

- Bakhtin, M.M. [1952-53] 1986. "The problem of speech genres." In C. Emerson and M. Holquist (eds.), *Speech Genres and Other Late Essays*. Austin: University of Texas Press, 60-102.
- Du Bois, J.W. 2007. "The stance triangle." In R. Englebretson (ed.), *Stancetaking in*

- Discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction.* Amsterdam: John Benjamins, 139-182.
- Du Bois, J.W. 2014. "Towards a dialogic syntax." *Cognitive Linguistics* 25(3). 359-410.
- Langacker, R.W. 2001. "Discourse in cognitive grammar." *Cognitive Linguistics* 12(2), 143-188.
- Langacker, R.W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* Oxford: Oxford University Press.
- Levinson, S.C. 2006. "Cognition at the heart of human interaction." *Discourse Studies* 8(1), 85-93.
- Sakita, T.I. 2002. *Reporting Discourse, Tense, and Cognition.* Oxford: Elsevier.
- Sakita, T.I. 2006. "Parallelism in conversation: Resonance, schematization, and extension from the perspective of dialogic syntax and cognitive linguistics." *Pragmatics and Cognition* 14(3). 467-500.
- Sakita, T.I. 2008. "A cognitive basis of conversation: Alignment through resonance." 『言葉と認知のメカニズム』 ひつじ書房 621-633.
- Schegloff, E.A. 2006. "On possibles." *Discourse Studies* 8(1), 141-157.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.
- Tannen, D. 1989. *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Voloshinov, V.N. [1929] 1986. "Verbal interaction." In L. Matejka and I.R. Titunik (trans.), *Marxism and the Philosophy of Language.* Cambridge, MA: Harvard University Press, 83-98.
- 山梨正明 2009 『認知構文論：文法のゲシュタルト性』 大修館書店

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- Sakita, Tomoko I. "Stance management in oral narrative: The role of discourse marker *well* and resonance." *Functions of Language* 査読有 2016年(予定)
- Sakita, Tomoko I. "Discourse markers as stance markers: *Well* in stance alignment in conversational interaction." *Pragmatics & Cognition* 査読有 21:1 pp.81-116 2013年

- Sakita, Tomoko I. "Survey of the discourse marker *well* in quoted speech in spoken American English." 言語文化 査読有 Vol.15 No.4 pp.331-357 2013年
- Sakita, Tomoko I. "Interactional management in conversational concession with the stance marker *well*." GR:同志社大学グローバル地域文化学会紀要 査読有 No.1 pp.59-87 2013年

〔学会発表〕(計1件)

- Sakita, Tomoko I. "Stance management and self-positioning in oral narrative." テクスト談話学会 第25回年次大会 2015年7月6-8日 Minneapolis, USA

〔図書〕(計2件)

- 崎田 智子 ひつじ書房 「認知言語学と談話分析：対話への新たなアプローチ」『認知言語学Ⅰ』(講座 言語研究の革新と継承) 2016年(予定)
- 崎田 智子 ひつじ書房 「対話における発話の創発-認知と対話のインターフェース」『言語の創発と身体性』 pp.547-562 2013年

6. 研究組織

(1)研究代表者

崎田 智子 (SAKITA, Tomoko I.)
同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：10329956